

## 株を守る

出光 計助

大平さんといえば、すぐ目に浮かぶのは、あの人なつこい、なんともいえない笑顔である。これがまた、人をひきつける魅力になっていた。私がこの笑顔に最初にお会いしたのは、確か池田勇人さんのお宅で、もうかれこれ三十年も前のことである。その時には、大平さんは池田さんの秘書官をやっておられたが、同じく一橋出身ということで、それ以来、仲良くさせていただいた。秘書官から代議士に初めて当選したということ、それなら、お祝いに食事をしましょうということになった。昔、長谷川一夫さんがやっていた「賀寿老」で、食事を差し上げた。その時、大平さんは和服を着て袴をはいてきたのはいいけれど、足袋をはいていなかった。その姿が本当の書生さんみたいで、実に楽しかった。大平さんはお酒を飲まないが、こちらは大の酒好き。勝手に酒を飲んでしたが、大平さんは好物の焼きイモをばくつきながら、夜遅くまでつきあってくれた。

この書生っぽい焼きイモ好きの人が、一國の総理大臣になるとは考えられもなかった頃、ゴルフをしようということになって、小金井カントリーに行った。大平さんのスウィングは、とても言葉では表現できないような奇妙なスタイルである。それで、『今日こそはスウィングを直してあげましょう』と冗談を言いながら、コースを回っていた。この日は、大平さんはよく当っていた。忘れもしない、六番にきた時である。ここの六番は右側に林があって、その奥はOBになっている。私は右に押し出したから当然OBになって、これは大平さんにやられたかなと思った瞬間、ボールが木に当って、カーンと快音を発してフェアウェイの真ん中に戻ってきた。

すると、大平さんは「兎が木の株に当たったようなものだ」と一言、警句を発した。こちらはなんのことがその意味がわからず、面白いことを言うなと思っていた。そのころ私は大平さんが経済学や社会学のほかに、漢学を好み、孔子や老子を論じていることなど、少しも知らなかった。後日、このことを知り調べてみたら、この言葉は、中国の韓非子の「守<sub>レ</sub>株」（くいぜを守る）というものであることがわかった。韓非子いわく

宋人<sub>（そわいじん）</sub>に田を耕す者有り。田中に株有り。兎走りて株に触れ、頸を折りて死す。因りて其の末<sub>（すえ）</sub>を積<sub>（す）</sub>てて株を守り、復<sub>（ま）</sub>た兎を得んと冀<sub>（ねが）</sub>う。兎は復<sub>（た）</sub>得べからずして、身は宋国の笑と為れり。』中国の故事と名言五〇〇選<sub>（一）</sub>

これは、韓非子が進化を説き、堯や舜などへの復古をいませめた有名な寓話の一部である。わが国でも戦前、北原白秋が取り上げ、山田耕笈の作曲で、「待ちぼうけ」という題名の童謡として、全国で愛唱されていたものだった。大平さんは、私とのゴルフの戦いのなかで、この寓話を持ち出して、「兎が木の株に当たって死ぬなんて、ラッキーなことは、もう二度と起りませんよ。また当てるにすると笑われますよ」と、私の偶然の勝利を軽くいなされたものだったと、数年後にわかり、一人赤面した。

この咄嗟の警句からもわかるように、大平さんという人は、普段はアウーととぼけておられたが、実際にはどんな環境にあっても、当意即妙、奇才縦横で、物事の本質を見抜く目をもっておられた。国際感覚も抜群で、欧米各国首脳にもその率直誠実な人柄が通じるようになって、何でも自由に話し合えるムードができてきた。とくにサミット会議などでは、世界各国首脳と対等に話し合いのできる最適の人であった。国内的には、国家財政困難な折、財政のオーソリティであった大平さんが、あと一年でも二年でも総理大臣をやっておられたらと、本当に残念でたまらない。

（出光興産相談役）